

# まごころだより

2024 年 1 月

あけましてあめでございます。

20 年前、まごころは自坊を開放し富山型デイサービスとして産声を上げました。20 周年を迎え、節目の年として新たな気持ちで正月を迎えております。

開所当時は、富山型デイサービスとして開所案内・見学会案内を出しても、来るのは障がいを持った子供の親ばかりでした。また、利用者もほとんどおらず、利用者ゼロの日が続いたこともありました。そんな初期の頃の利用者で、富山型を象徴し今でも記憶に残るお二人がいます。それは認知症の母と障がいを持った娘の親子です。利用時には母親は自分の食事も娘の方に押しやり、なにくれとなく娘の世話をしながら過ごしていました。娘はどこで覚えたのか「堇の花咲くころ」の歌をよく口ずさんでいました。その後、何組もの親子（富山ケアネットからのお祝い）での利用はありましたが、どの親も子供のことを最優先にする姿を見せてくれました。そして母親が口にするのは、多くの高齢者がよく言う「早くお迎えが来て欲しい」ではなく「この子のために一日でも長く」という子を思う言葉でした。



（語らい）

次の大河ドラマのモデルとして話題になっている紫式部の曾祖父藤原兼輔の歌に

『人の親の 心は闇に あらねども 子を思ふ道に 惑ひぬるかな』

（子を思う親心となるとまるで闇夜で道に迷うように思い迷って分別を失ってしまう）

というのがあります。

昔からある子供ゆえに惑う親心。もしかするとそれは煩惱とか執着とか言われるものであるかもしれませんが。それでも、このような親子を見ていると、一緒に過ごす時間の大切さすばらしさをしみじみ感じ、『富山型』で良かったと思ったものでした。

私たちはこの 20 年『在宅を守る』という思いで、まごころを続けてきました。



自宅での衣服の管理が出来ないと言われると、洗濯や衣服の管理を引き受け、食事の準備が難しいと言われると、簡単な朝食や夕食も提供しました。また、災害時や家族の急な事情でショートステイが間に合わない時には、職員の誰かが夜勤し「緊急時お泊りデイ」も行いました。更に、最近子どもが遠距離在住のことが多く、受診などのちょっとした外出の手伝いもするようになりました。

ました。

そして 2016 年在宅を守る為には地域の理解が必要だと考え、地域の人との交流の場として「まごころ分家」を開設しました。

ここ数年コロナにより周囲の状況は変わってきましたが、根底にある思いは変わりません。いやコロナによって人のつながりが希薄になったからこそ、在宅を守るためには、人との繋がりやお節介が必要だと再認識しました。

20 年間順風満帆とは決して言い難く、皆様にもご心配ご迷惑をおかけしてきたことと思います。この場を借りてお詫び申し上げます。

20 年の節目の元旦に、私たちは気持ちを新たに出発したいと思っております。

どうかこれからもよろしくお願いします。

そして、みなさんにとって今年もいい一年でありますようにお祈り申し上げます。



(まごころ分家)



(あったかいね)



(仏さんに感謝)



(いい子♡ いい子♡)